

韓半島における 初期鉄器の年代と特質

The Calendar Date and Feature of Early-Iron Tools in Korean Peninsula

李 昌熙

LEE Chang-hee

はじめに

①粘土帯土器の実年代

②金属器副葬のあり方

③鉄器の出現時期

④韓半島初期鉄器の実態—鉄斧—

おわりに

【論文要旨】

日韓両地域における鉄器の出現は、燕国の鉄器生産能力の増大、それによる東方への普及に伴ったものと考えられてきた。その時期は戦国末から前漢初にあたると考えられているために、出現年代は紀元前3世紀をさかのぼることはない。しかしその根拠は明確ではなく、燕国における鉄器の普及は紀元前300年よりも古かった可能性が説かれつつある。

このような状況の下、韓半島最古の鉄器に伴う円形粘土帯土器の実年代を、炭素14年代を用いて明らかにした結果、韓半島ではすでに紀元前4世紀には鉄器が出現していたことがわかった。この結果は、鉄器が出土した遺構の炭素14年代、弥生長期編年、そして粘土帯土器と弥生土器との併行関係とも整合的である。

さらに鉄斧を中心に韓半島の初期鉄器を検討し、日本の資料との比較も行ったところ、両地域での鉄器の出現時期には大きな差はないが、その特徴は異なることもわかった。すなわち鑄造鉄斧には形態、鑄型、出土状況など多くの差異が見られるのである。しかし、これは二条突帯斧の出土事例が韓半島より日本列島の方が多くことに原因の一つがあると考えられる。したがって、日本列島を燕国の影響圏に含めることで、韓半島を介した流入ではなく燕からの直接流入と考えるのは妥当ではないと考える。

日韓両地域で出土する外来系土器をふまえて考えると、日本列島最古の鉄器の出現は円形粘土帯土器人の移住と係っている。円形粘土帯土器は日韓地域ともに在地系ではなく外来系の土器である。円形粘土帯土器人がもっていた初期鉄器とその技術および使い方が、移住地への定着過程で、在地の環境の違いによって変わっていったと考えられる。当時の松菊里文化と弥生文化における取り込まれ方の違いによって両文化の鉄器に対するあり方も異なってくるだろう。

【キーワード】 初期鉄器, 鉄斧, 粘土帯土器, 実年代, 移住

はじめに

これまで韓半島において鉄器が出現する背景について考える際、まず取り上げられるのが文献記事であった。紀元前108年の楽浪郡の設置、紀元前194年の衛満朝鮮の成立とそれに伴う古朝鮮遺民の南下という歴史的な事象が結びつけられるのが常だったので、実質的な上限年代は紀元前108年、あるいは紀元前194年であった。さらに発見される戦国系の鑄造鉄器が増加しつつあることをうけて、燕国の鉄器生産能力が増大する時期を戦国時代後期に求めていたため、紀元前3世紀よりも古く考えることはできなかった。また、弥生土器との併行関係に基づいた従来の弥生年代観も古くさかのぼらせない根拠の一つであった。

筆者は、初期鉄器時代に活発化する日本列島西半部と韓半島南部（韓国領域）における金属器の生産と流通に関心を持っているが、この問題を考えるためには確実な年代観のもとでの研究が不可欠であることはいうまでもない。2003年に発表された新しい弥生時代の年代観（以下、弥生長期編年）によれば、まったく異なる鉄の歴史が描けてしまうからである。そのため、まずは鉄器が出現する時期の韓半島の土器型式の実年代をAMSによる炭素14年代測定によって明らかにしたい。つまり弥生長期編年にもとづくものではなく、韓半島の資料を用いたAMS-炭素14年代測定によって実年代を求めることにする。これは弥生長期編年の検証も兼ねた作業である。

一方、粘土帯土器と弥生土器との考古学的な併行関係については、これまで筆者も検討を進めてきたが、本稿では最新の併行関係〔李昌熙・石丸2010〕にもとづき、炭素14年代の結果を反映させている（図1）。

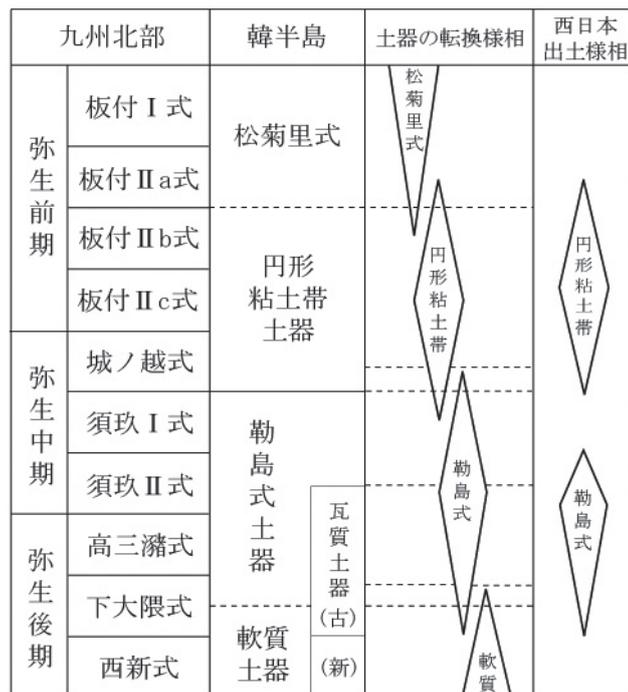


図1 粘土帯土器と弥生土器との併行関係
〔李昌熙・石丸2010〕より

①……………粘土帯土器の実年代

炭素14年代を測定する試料は、2007年冬から2010年春まで筆者が自らサンプリングや前処理をしたもので、数は約100点にのぼる。試料の種類は土器付着炭化物、動物骨、人骨、炭化穀物、漆などであり、もっとも多いのはシカの骨である。人骨は甕棺の中でシカの骨とともに埋葬されていたものであり、両者を測定することで海洋リザーバー効果の影響の有無に関する検討も行った〔李

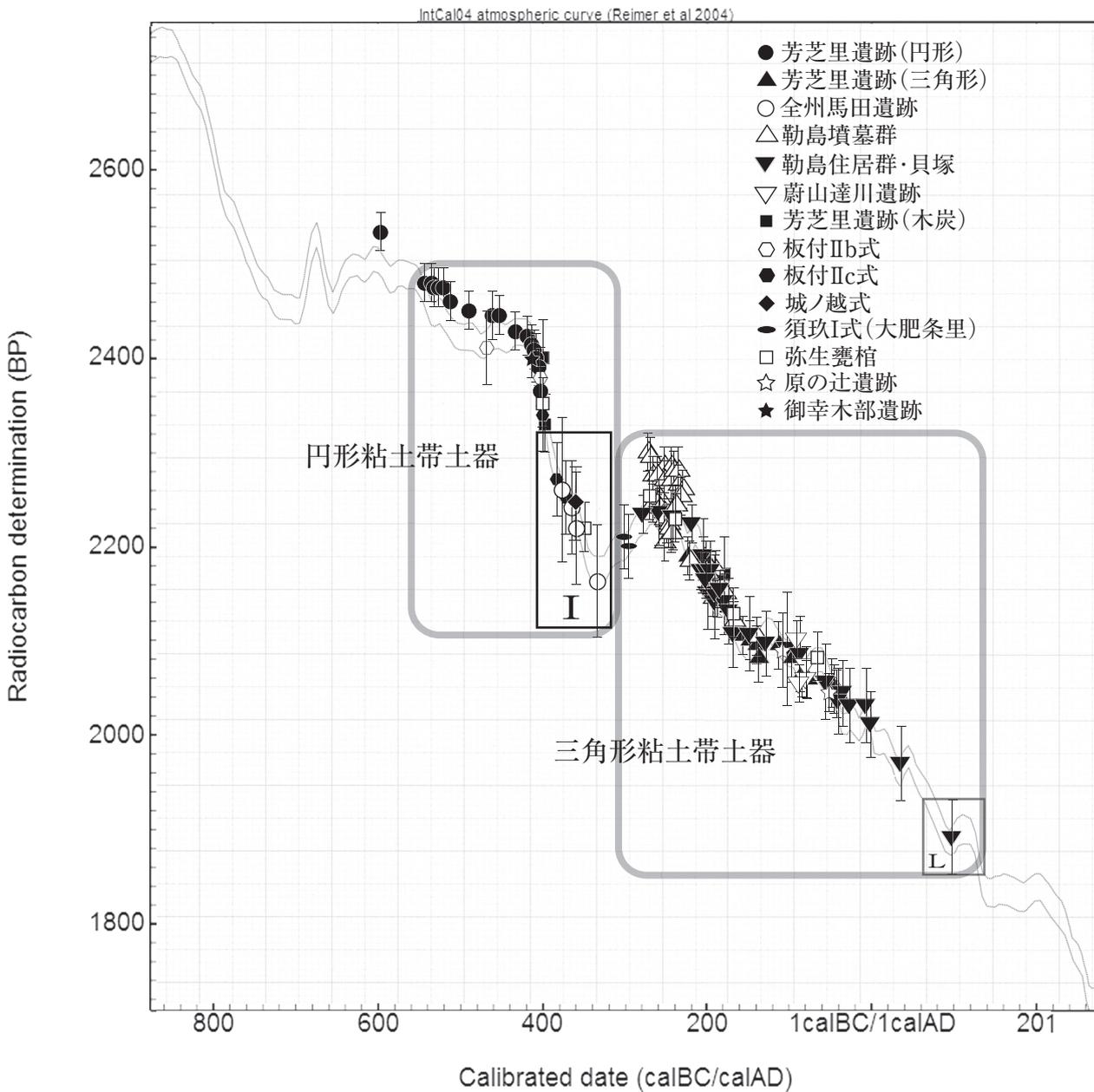


図2 粘土帯土器と伴う資料の炭素14年代

昌熙 2013, 2010]。その結果をここでまとめておこう。分析に用いたすべての炭素14年代の中心値を較正曲線(IntCal04)にプロットし(図2),ここから粘土帯土器の実年代を確定した。結果は次の通りである。なお、詳細は拙稿を参照していただきたい[李昌熙 2013]。

芳芝里遺跡で円形粘土帯土器に伴う資料の炭素14年代は2400 ¹⁴C BP 台が多いので、実年代は基本的に紀元前4世紀初頭以前と考えてよいだろう。一方、上限年代は板付II a式期までさかのぼる可能性を否定できないので、紀元前7~6世紀のどこかにくる⁽¹⁾と考えざるを得ない。円形粘土帯土器の下限年代は三角形粘土帯土器の上限年代と重なることから、紀元前300年前後と考えられる

が、筆者が調査した芳芝里遺跡の資料には紀元前300年前後に相当する2200・2100¹⁴C BP台を示すものはない。しかし、2200・2100¹⁴C BP台を示す^{マジョン}馬田遺跡や^{カルドン}葛洞遺跡の円形粘土帯土器の資料がある。また日本列島でもっとも多く、円形粘土帯土器が出土している時期が板付Ⅱc式～城ノ越式の時期であることを考えれば、今後、2200・2100¹⁴C BP台の炭素14年代を示す円形粘土帯土器が増える可能性は高い。

三角形粘土帯土器は、^{スクド}勒島遺跡の炭素14年代からみて、その上限を紀元前3世紀初～中頃とみることができる(図2)。勒島遺跡の墳墓群と、住居や貝塚の古い時期の炭素14年代は須玖Ⅰ式に当たり、勒島式土器が須玖Ⅰ式から併行するという結果をふまえて、暫定的に上限年代を紀元前300年頃としておく。以上、粘土帯土器と関わる炭素14年代は弥生土器の炭素14年代と整合的であり、両者の土器併行関係とも整合的な結果であった。

②……………金属器副葬のあり方

表1をみると、主に円形粘土帯土器段階には青銅器が、三角形粘土帯土器段階には鉄器が副葬されていることがわかる。南陽里^{ナムヤンリ}、合松里^{ハップソンリ}、素素里^{ソソリ}遺跡などの木棺墓から出土した鑄造鉄斧、鉄鉞、鉄鏝、鉄鎌は、細形銅剣などの青銅儀器と共伴するので、韓半島南部ではもっとも古い時期の鉄器と考えられてきた。円形粘土帯土器と鉄器が共伴する調査事例には、南陽里2号墓、葛洞3号墓、同4号墓がある。合松里と素素里遺跡では黒色磨研長頸壺と鉄器が共伴している。これらの黒色磨研長頸壺は円形粘土帯土器段階(円形粘土帯土器の組み合わせとして)のものと判断されるが、三角形粘土帯土器段階にも黒色磨研長頸壺の副葬が行われているので、口縁部の断面が円形粘土帯である土器だけならば、上記の三例ですべてである。この中で葛洞4号墓では円形粘土帯土器と三角形粘土帯土器が伴うため、すでに三角形粘土帯土器段階にはいった墳墓と考えられる。型式学的な相対編年は確立されていないものの、鉄器が主に三角形粘土帯土器と共伴することをふまえると、南陽里2号墓と葛洞3号墓の円形粘土帯土器はもっとも新しい時期のものといえる。また、葛洞2号墓で出土した鉄鎌は、同3号墓で出土した鉄鎌と比較すると、同時期の墳墓である可能性が非常に高く、同6号墓で出土した鉄器の組み合わせは南陽里遺跡で出土した鉄器の組み合わせと同様であることから同時期と捉えることができる[李昌熙2013]。

葛洞遺跡が所在する完州の新豊遺跡(湖南文化財研究院調査)では、2010年の1次調査で円形粘土帯土器と鉄器、青銅器が共伴する多数の墳墓が調査されており、2011年の2次調査では韓半島で初めての竿頭鈴2点、鑄造鉄斧、土器類(円形粘土帯土器段階)などが共伴した墳墓をはじめ、円形粘土帯土器と鉄器、青銅器が共伴する多数の墳墓が調査された。このような事例はこれからも増えると予想される。

表 1 墳墓における粘土帯土器と金属器の共伴一覧 [李昌熙 2013]

遺跡	遺物	土器	青銅器	鉄器
文唐洞遺跡		円形粘土帯甕, 黒色磨研長頸壺	遼寧式銅劍	
槐亭洞遺跡		円形粘土帯甕, 黒色磨研長頸壺	細形銅劍, 多鈕粗文鏡, 防牌形銅器, 劍把形銅器, 銅鐸	
東西里遺跡		黒色磨研長頸壺	細形銅劍, 多鈕粗文鏡, 劍把形銅器, 喇叭形銅器	
南成里遺跡		円形粘土帯甕, 黒色磨研長頸壺	細形銅劍, 多鈕粗文鏡, 銅斧, 防牌形銅器, 劍把形銅器, 銅鑿	
全州如意洞1号墓		黒色磨研長頸壺	多鈕粗文鏡, 銅斧, 銅鑿	
院北里ナ-9号墓		黒色磨研長頸壺	細形銅劍	
九鳳里遺跡		黒色磨研長頸壺	細形銅劍, 多鈕粗文鏡, 銅斧, 銅鑿, 銅鉞, 銅戈, 銅矛	
南陽里2号墓		円形粘土帯甕		鉄鉞
合松里遺跡		黒色磨研長頸壺	細形銅劍, 多鈕細文鏡, 銅戈, 円蓋形銅器, 異形銅器	鑄造鉄斧, 鉄鑿
素素里遺跡		黒色磨研長頸壺	細形銅劍, 多鈕細文鏡, 銅戈	鑄造鉄斧, 鉄鑿
葛洞1号墓		黒色磨研長頸壺	細形銅劍・銅戈の鑄型	
葛洞5号墓		長頸壺	多鈕細文鏡	
葛洞3号墓		円形粘土帯甕, 黒色磨研長頸壺	銅鏃	鑄造鉄斧, 鉄鎌
葛洞2号墓		組合式牛角形把手, 底部 (円形粘土帯甕or長頸壺)		鉄鎌
葛洞6号墓		組合式牛角形把手付壺, 黒色磨研長頸壺		鑄造鉄斧, 鉄鉞
葛洞8号墓		(円形粘土帯?) 甕	銅矛	
葛洞4号墓		円形・三角形粘土帯甕, 組合式牛角形把手付壺		鑄造鉄斧
信洞里7地区1号墓		三角形粘土帯甕	細形銅劍	鑄造鉄斧
信洞里7地区2号墓		三角形粘土帯甕		鉄鉞
林堂FⅡ-34号墓		組合式牛角形把手付壺, 壺形土器		鑄造鉄斧, 鉄鑿, 板状鉄器片
林堂FⅡ-33号墓		三角形粘土帯土器, 壺形土器		板状鉄器片
造永 I B-7号墓		三角形粘土帯甕, 黒色磨研長頸壺	細形銅劍	鑄造鉄斧
八達洞49号墓		小型甕 (○or△粘土帯), 黒色磨研長頸壺		鑄造鉄斧
八達洞57号墓		黒色磨研長頸壺, 高坏, 組合式牛角形把手付壺		鑄造鉄斧, 鉄劍, 鉄矛, 鉄鑿, 鉄鉞
八達洞71号墓		黒色磨研長頸壺		鉄劍
八達洞77号墓		三角形粘土帯甕, 磨研長頸壺		鑄造鉄斧, 鉄劍
八達洞90号墓		三角形粘土帯甕・椀, 高坏, 蓋, 棒状把手付壺	銅矛, 銅戈	鉄劍, 鉄矛, 板状鉄斧
八達洞99号墓		高坏	劍把頭飾, 漆鞘 (劍身なし)	鉄矛
※朝陽洞5号墓		組合式牛角形把手, 棒状把手付長胴甕, 高坏, 瓦質土器	多鈕素文鏡, 銅鐸	鑄造鉄斧, 鉄劍, 環頭小刀, 鉄戈, 鉄矛, 板状鉄斧, 鉄鎌

※瓦質土器の出現期に当たる朝陽洞5号墓も参考として加えた。

③ 鉄器の出現時期

① 考古学的な共伴関係から、鉄器と共伴する円形粘土帯土器は新しい段階にあたることから、図2の較正曲線上では、前4世紀のある時点で鉄器が出現したことが予想できる。

② 炭素14年代測定値については、鉄器が出土した遺構の測定結果を表2に示した。葛洞遺跡や馬田遺跡から出土した鉄器は、初期鉄器の代表的な遺跡として知られる南陽里、合松里、素素里

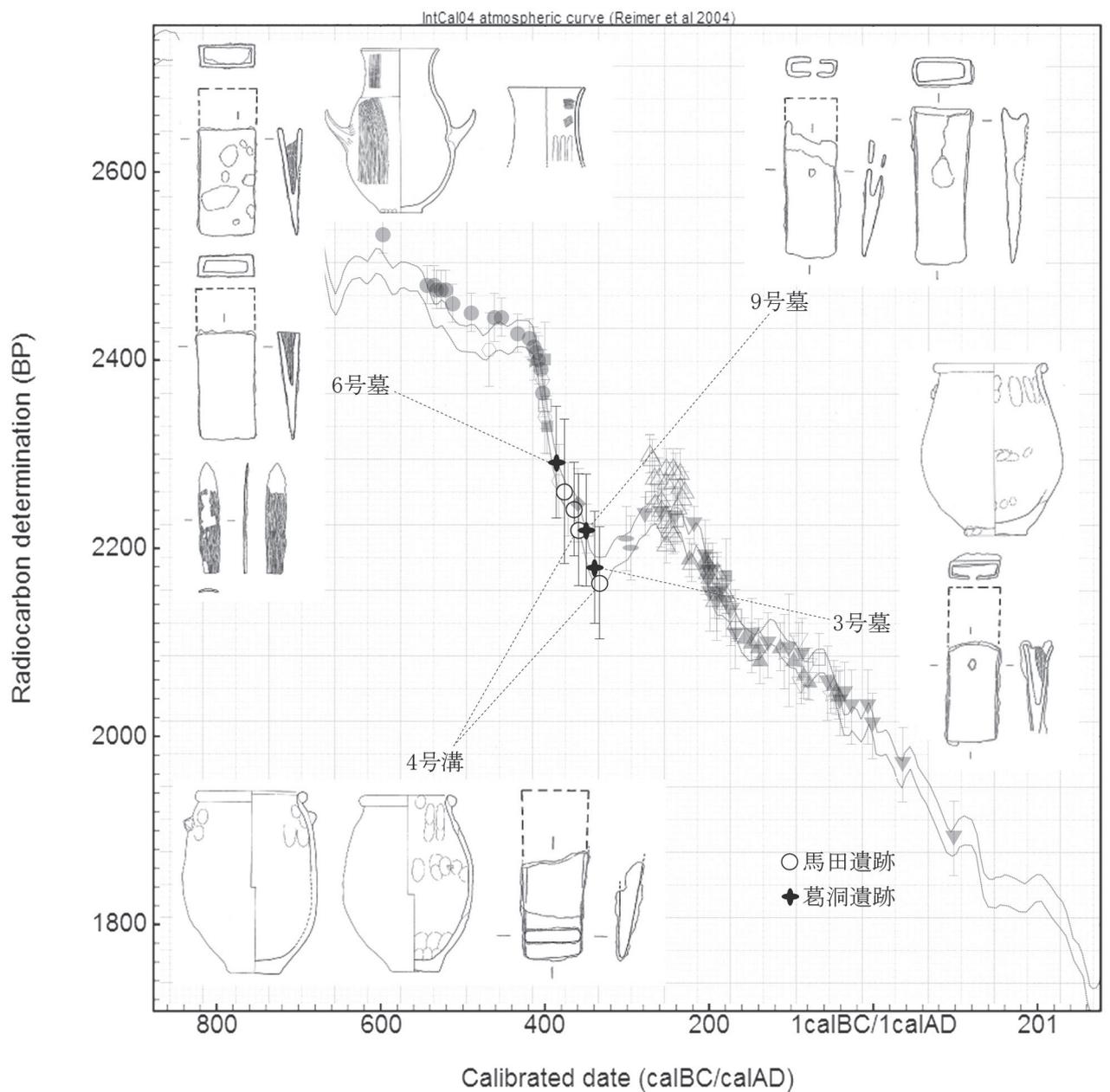


図3 馬田遺跡と葛洞遺跡の炭素14年代プロット

遺跡などの鉄器と現状では同一型式であり、これらの遺跡の実年代とも大きな差はないと考えられる。共伴した土器は明らかに靑島式土器（三角形粘土帯土器）より古いので、前4世紀の遺構と推定できる⁽²⁾（図3）。

③ 弥生土器との併行関係をみると、円形粘土帯土器の新しい段階と併行する弥生土器は板付Ⅱc式と城ノ越式である（図1）。これまで最古の鉄器として弥生早期や前期初頭に比定されていた曲り田遺跡の鉄片や齊藤山遺跡の鑄造鉄斧片は、春成秀爾によって時期が特定できないことが証明され[春成秀爾 2004；2006]、今では弥生時代前期末～中期初頭には確実に出現したものと考えられている[村上恭通 2011；野島永 2009]。つまり韓半島南部と日本列島との鉄器の出現時期に大きな差はないものと考えられる。また、弥生長期編年によると、前期末～中期初頭はおよそ紀元前380～320年ごろである。

よって、①から③を総合的に判断すると、韓半島で鉄器が出現する時期は紀元前4世紀前半頃でよいだろう[李昌熙 2013, 2010]。しかし、弥生時代前期末～中期初頭の炭素14年代測定値がまだ少ない点、葛洞や馬田遺跡の測定試料がほとんど木炭で、測定値の誤差範囲も広い点などを踏まえると、鉄器の出現は紀元前4世紀代のどこかにくると考えられる。

表2 葛洞遺跡と馬田遺跡の炭素14年代

試料番号	測定機関番号	試料種	炭素14年代 (¹⁴ C BP)	較正年代：IntCal04 (cal BC)	確率 %	出土地
葛洞1	SNU03-649	矢柄	2180±60	385 cal BC - 90 cal BC 70 cal BC - 60 cal BC	94.1 1.2	3号墓
2007-WG1	SNU07-284	木炭	2290±60	510 cal BC - 195 cal BC	95.4	6号墓
2007-WG4	SNU07-341	木炭	2220±60	400 cal BC - 155 cal BC 135 cal BC - 115 cal BC	93.6 1.8	9号墓
馬田Ⅱ区域 初期鉄器時代4号溝	SNU-06-1048	木炭	2160±60	370 cal BC - 80 cal BC 80 cal BC - 50 cal BC	90.4 4.9	馬田Ⅱ区域 4号溝
馬田Ⅱ区域 初期鉄器時代4号溝	SNU-06-1049	木炭	2260±50	400 cal BC - 335 cal BC 330 cal BC - 200 cal BC	33.3 61.3	馬田Ⅱ区域 4号溝

④……………韓半島初期鉄器の実態—鉄斧—

いわゆる戦国系鉄器のうち、鑄造鉄斧はおおむね二条突帯があるものとなないものの二種類に分けられる。両者ともに遼東地域～韓半島～日本列島に至る広い範囲に分布するが、韓半島南部で出土する初期鑄造鉄斧のなかに二条突帯をもつものはまだ2本しか出土していないのに対して（図8の28・29）⁽³⁾、日本列島出土のものはほとんどが二条突帯をもつ。しかし日本列島で出土する鉄片や再加工品がすべて二条突帯斧の一部なのかどうかはわからないので、ここでは初期鉄器のうち、韓半島と日本列島での出土量が比較的多い鉄斧を中心にみてみよう。

形態 二条突帯斧は燕国～日本列島にかけて形態や大きさがほとんど同じであり、非常に規格化された印象を受ける（図4）。全長は15cm前後であり[村上恭通 1988]、平面形態は刃部幅対全長の

比が1:1.8程度の長方形である。一方、韓半島南部の初期鉄斧は、全長が二条突帯斧より2.5～3.0cm程度長く、刃部幅はより狭い。全長が刃部幅の二倍を超える細長方形の平面形態をもつ。二条突帯がない鉄斧の中で、仮に龍淵洞と蓮花堡のものが戦国系鑄造鉄斧を代弁するものとする⁽⁴⁾と、韓半島南部のものとは差異がある(図4)。また、刃部から柄部までの長さの計測値を図5に表したところ、韓半島と日本列島との差が明らかであった。なかでも龍淵洞や蓮花堡のものは日本列島に近い。

鑄型 二条突帯斧は双合范で作られ、側面形態が左右対称であり、柄部形態は上下対称の長方形である。しかし、二条突帯がないものはほぼ単合范で作られ、柄部形態は若干梯形である。このような形態は、構造的にも双合范よりは単合范で作るのが容易と考えられ、身部断面の片方が長い龍淵洞の鉄斧(図6の4・5)をみると十分納得できる。しかし、韓半島南部の初期鉄斧の場合、周知の様に、林堂遺跡の二条突帯斧(図8の29)は双合范で作られたものであるが、他は単合范、双合范両方で作られたものである。それでも柄部形態は梯形が多く、単合范が多数を占めていると考えられる⁽⁵⁾。また、木柄と連結するための釘孔があるものも多い。一方、八達洞の鉄斧(図8の31～34)はすべて双合范である。柄部形態が上下対称の長方形であることをみると、柄部と断面形態が鑄型を推定する有用な基準の一つと考えられる。これらは、林堂の二条突帯斧を含め全部三角形粘土帶土器段階のものであり、他より新しい時期のものである。燕国の鉄斧に対する具体的な検討が要るものの、そもそも二条突帯斧は双合范で、細長方形斧は単合范で作られたものが、どうやら韓半島南部ではそのような規格が混乱していたのではないだろうか。鑄型を踏まえ、細長方形斧もっているこれらの特徴は、二条突帯斧とは機能差があったことを示している。側面形態が左右対称で

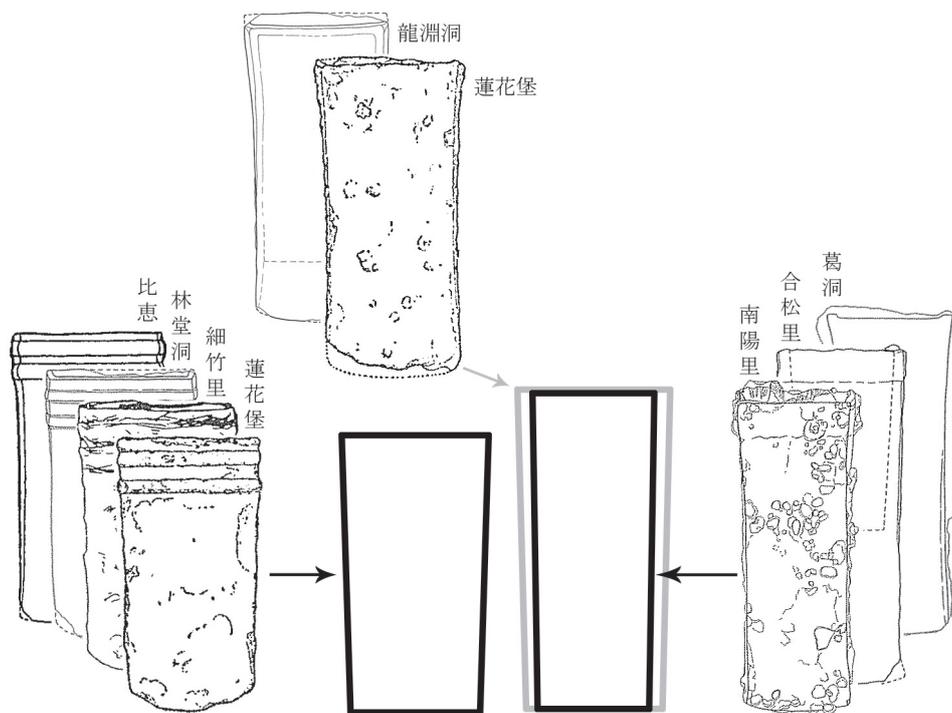


図4 鑄造鉄斧の平面形態の型式化(S=1/4)

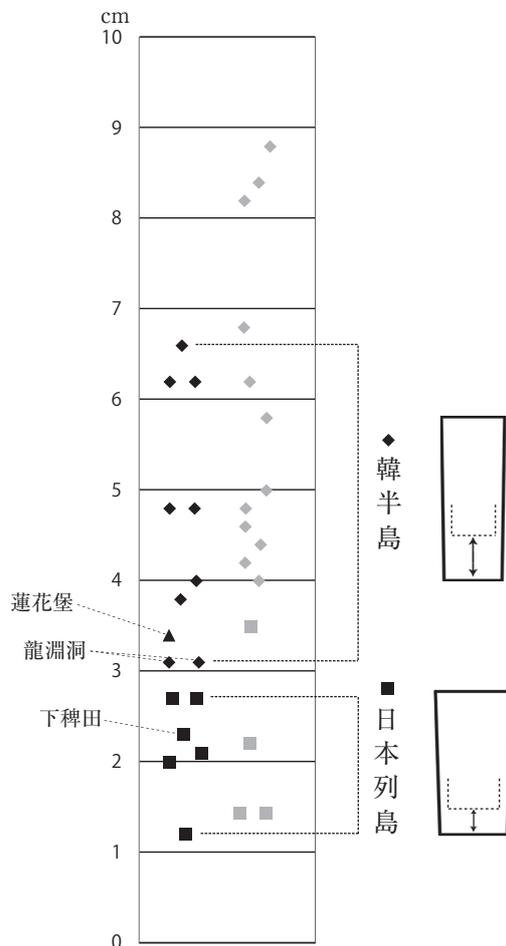


図5 鑄造鉄斧の刃部縦長の比較

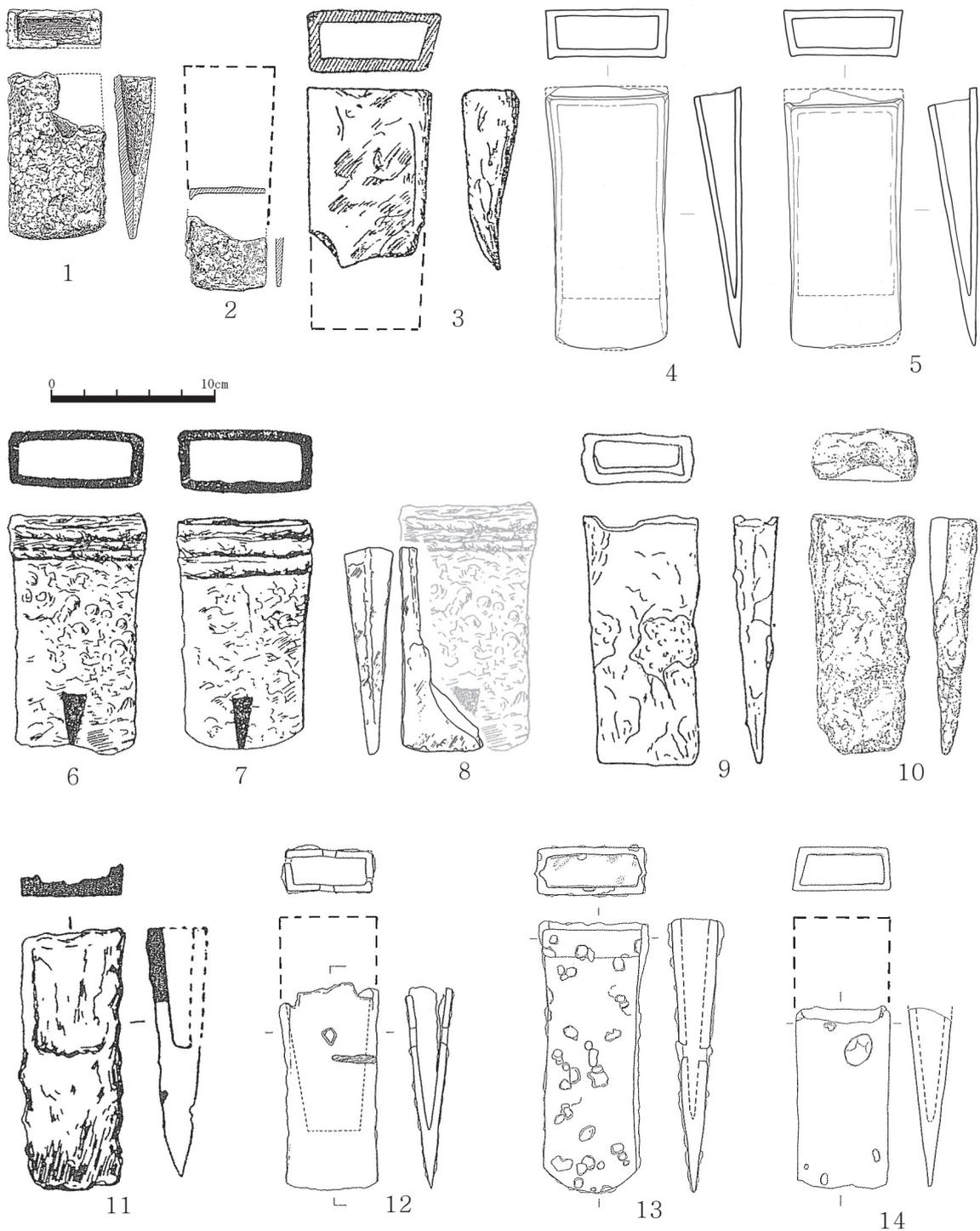
あり、身部断面の左右の長さが同一であるものと片方が長いものとは、木柄と結合する形が全く異なるためである。実見してから判断したい。例えば、中国東北地域で出土している鉄斧に木柄と連結するための釘孔がある場合は、全長を基準としてみると、ほぼ真ん中に釘孔があるものがほとんどである。したがって、図6の12、図7の18・19・24の韓半島南部の初期鉄斧は図に表現した破線の平面形態をもつと推定できる。

出土状況 韓半島南部では日本列島とは異なり、ほとんどが木棺墓の副葬品として出土している。相伴遺物には華麗な青銅器が多く、細形銅剣文化の典型的な姿をみせている。これらの墳墓は当時最上位階層の埋葬儀礼の遺産であり、ここから出た鉄斧は非常に貴重品といえる。したがって、これは鉄器の「普及」—広く一般にいきわたること（日本国語大辞典、小学館）—を示すものといえる訳ではない。

出土位置については表採によるものもあり、記録不備により正確に把握するのは困難なものも多いが、鉄斧を含めた鉄器類は木棺墓の補強土内部や上部、木棺上部、封土などの木棺外から出土している。銅鏡や銅剣などの青銅儀器類は床面や木棺内から出土する例が多いことを考えると、同じ金属器であってもその副葬行為としてもつ意味は青銅器とは異なっていたと考えられる。

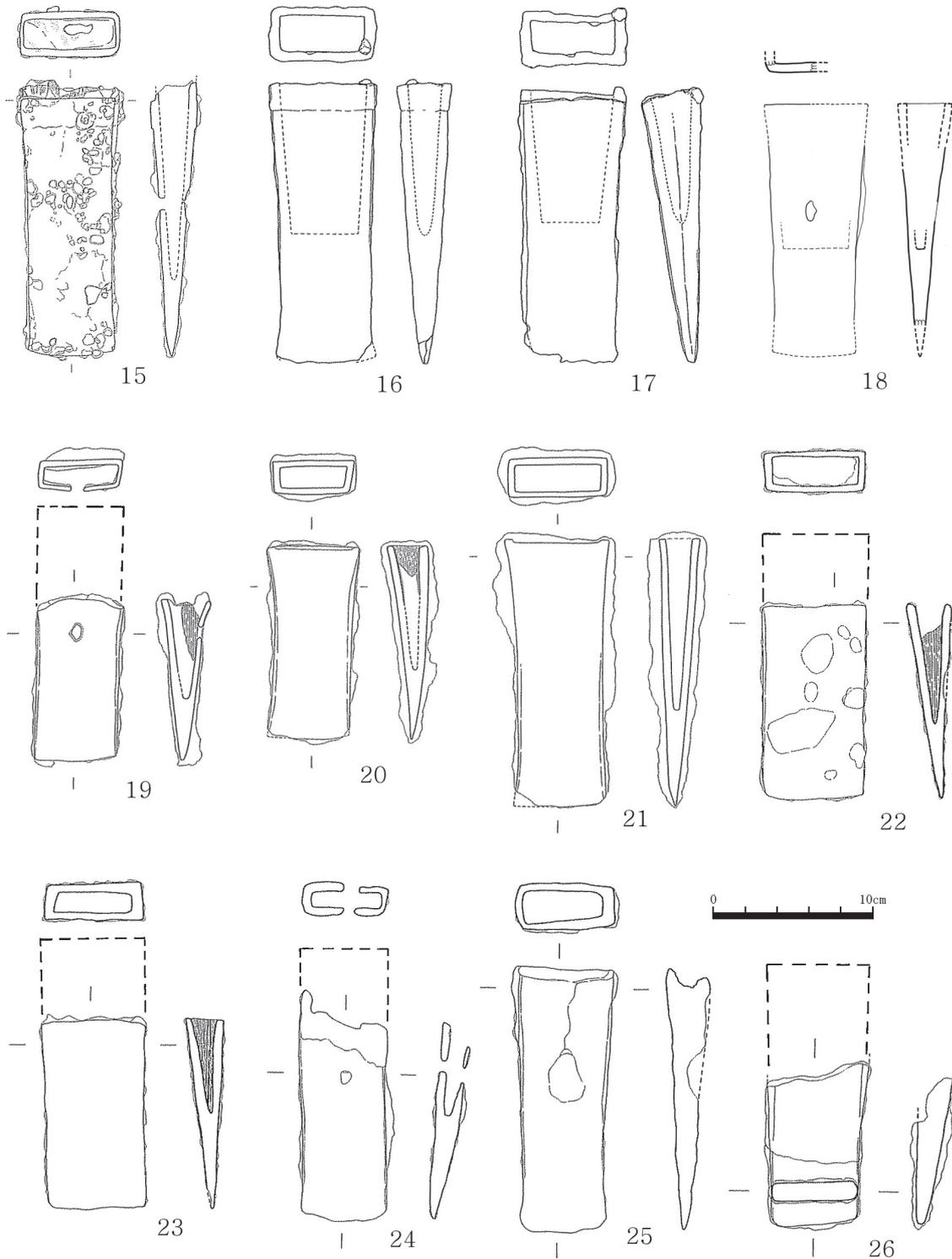
表3 初期鉄斧の日韓比較

地域	韓半島	日本列島
二条突帯	希少	ほとんど
出土状況	完形の副葬品	生活遺跡から出土した鉄片、再加工品
鑄型	単合范>双合范	双合范
形態	細長方形	長方形
刃部縦長	長い	短い



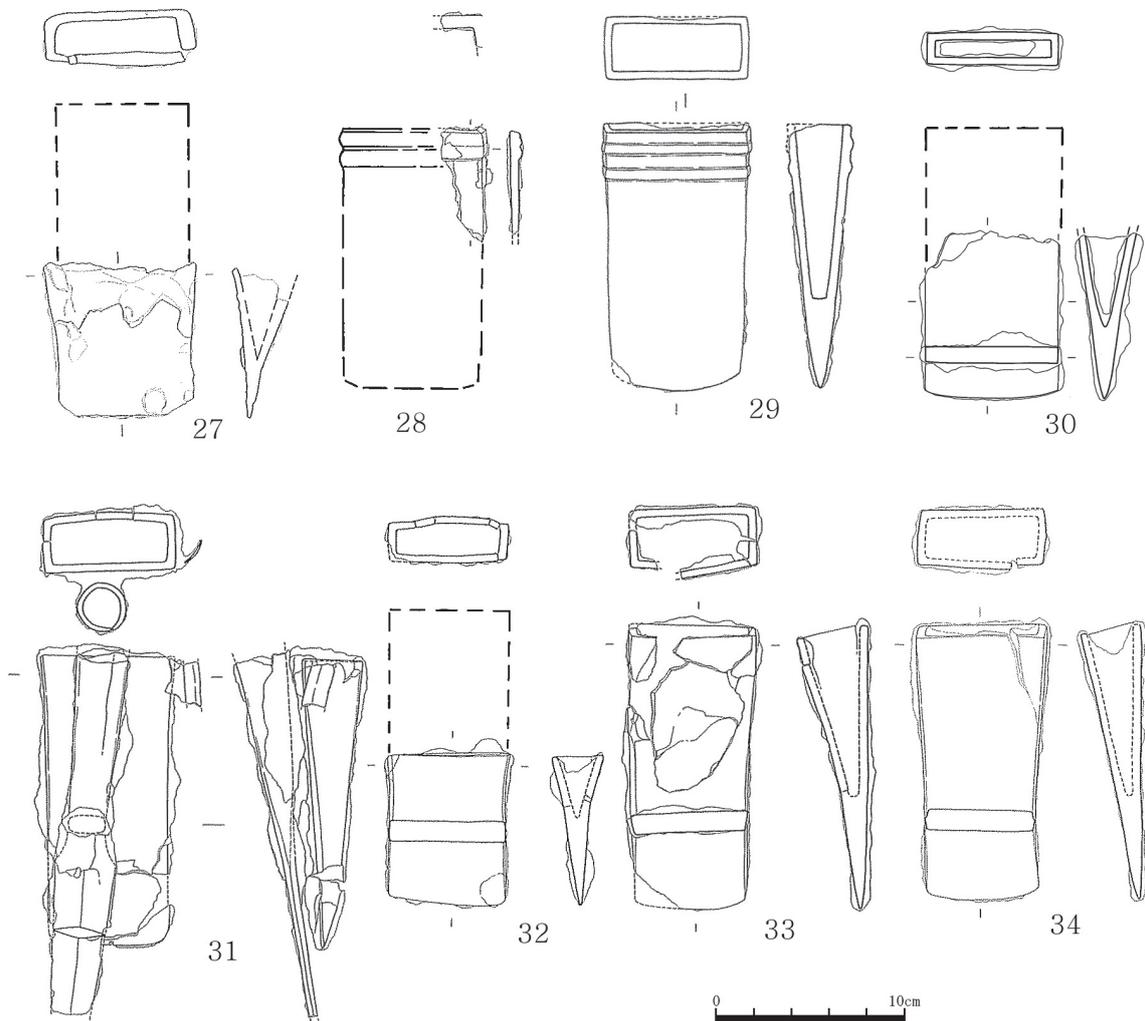
1・2：五洞 3：梨花洞 4・5：龍淵洞 6・7：細竹里 8：虎谷 9：所羅里 10：松山里
11：石山里 12：南陽里1号墓 13・14：同3号墓

図6 韓半島出土の初期鉄斧①(S=1/4)



15 : 南陽里4号墓 16・17 : 合松里 18 : 素素里 19 : 葛洞3号墓 20・21 : 同4号墓
 22・23 : 同6号墓 24・25 : 同9号墓 26 : 馬田Ⅱ-4号溝

図7 韓半島出土の初期鉄斧② (S=1/4)

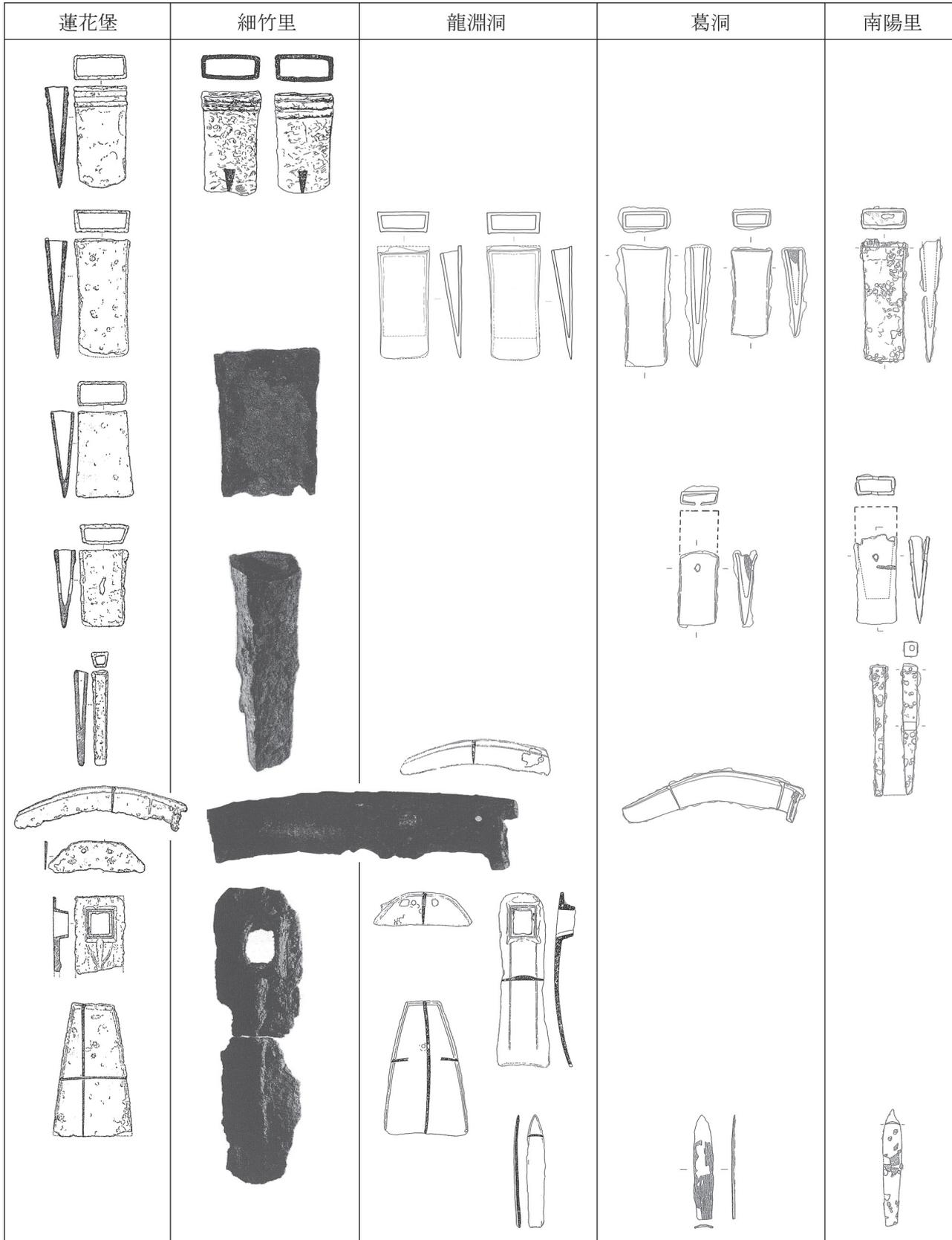


27：信洞里7地区1号墓 28：勸島ガN1E0 29：林堂FⅡ-34号墓 30：亀山洞1634号住
31：八達洞45号墓 32：同49号墓 33：同57号墓 34：同77号墓

図8 韓半島出土の初期鉄斧③ (S=1/4)

おわりに

以上のように、韓半島と日本列島にみられる初期鉄器のあり方の差は大きく、その理由として、韓半島を鉄器の生産地としての中国東北部や韓半島西北部といった燕国の領域に限定したとすれば、農耕技術にともなう農具として普及していたことや、燕国の影響が日本列島より直接的であったことなどに関連づけて考える説もある [村上恭通 1994]。一方、中国との直接的な関係によって日本列島には鉄器が入ってきたとも考えられている。しかしこの差というのは‘副葬品（貴重品）’と再加工品（実用品）の差であり、鉄の供給元とは関係ない可能性もあるので、結局、根本的な



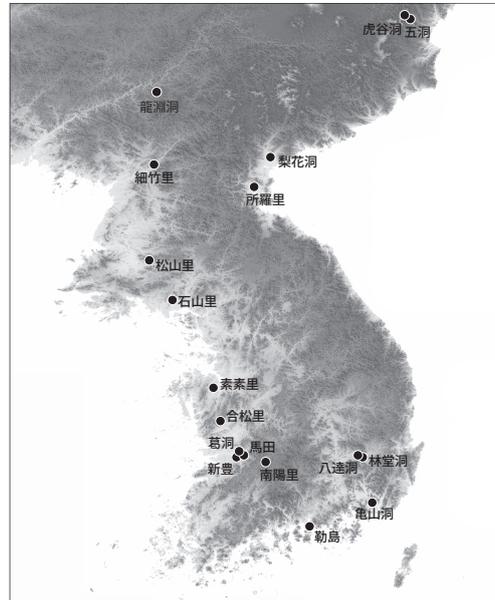


図10 韓半島出土の初期鉄器の分布

差異は、日本列島の方が韓半島より二条突帯斧が多いという点である。

前述したようにこれは今現在、出土している鉄斧だけからの見立てであり、今後、韓半島で二条突帯斧の発見が増加すれば、別の見方でできるようになる可能性はきわめて高い。なお日本列島の場合、初期鉄器を除けば燕国との関係を直接結び付けられるような文化要素はあまり見られないので、その供給元は韓半島に求めるのが自然であろう。周知の如く、日本列島で新しい段階の円形粘土帯土器が急増する時期は弥生時代前期末である。韓半島で弥生土器が急増するのは須玖I式からである。両地域で出土する土器を踏まえて考えると日本列島の最古の鉄器は円形粘土帯土器人の移住〔李昌熙 2011〕と係っていた可能性が高い。円形粘土帯土器人は外から韓半島へはいつてきた人びとであった。彼らは在地の松菊里文化を終息させ、初期鉄器時代を担う主体的な人びととなるが、日本列島に渡った人びとはますます弥生社会に同化・吸収されていく。韓半島では初期鉄斧が副葬品へ、日本列島では実用品として位置づけられることになった背景には、こういった移住のあり方の違いが深く係っていると考えられる。すなわち、移住民がもっていた初期鉄器とその技術および使い方が、移住地での定着過程のなかで、在地の環境によって変わったものと考えられる。また彼らの日本列島での墓についても考える必要がある。これまでは貴重な副葬品として扱われた痕跡はない。

したがって、日本列島での鉄器出現年代の上限は韓半島を規準に求めることができるだろう。つまり前述した韓半島における初期鉄器の実年代からみて、日本列島における鉄器の出現時期は紀元前4世紀のある時点より古くなることはないことを意味する。また、燕国の鉄器生産能力の増大をいわゆる戦国末～前漢初、古くても紀元前3世紀に求める従来の説の根拠が明確ではないなどの問題もある。考古学的に検討した最近の研究成果によると、燕国において鉄器が普及していたのは

紀元前 300 年よりも古い [石川岳彦 2011; 石川岳彦・小林清樹 2012]。さらに韓半島の状況も「普及」を示す状況とはいえないため、紀元前 4 世紀に鉄器が流入していた可能性を否定できない。

しかし、次のような課題も残っている。学界には未だ燕国の鉄器生産能力が増大する時期を紀元前 3 世紀とみる説が多く [村上恭通 2011 など]、それを受けて韓半島や日本列島における鉄器の出現年代は紀元前 3 世紀より古くなることはないという考え方が多い。また細竹里—蓮花堡類型に対しても再検討する必要がある。図 9 に表したように細かい器種構成には若干の差があるが、大きい枠組みの中でみると、葛洞遺跡では細竹里—蓮花堡類型の特徴的な鉄器の一つである鉄鎌も出土しているなど韓半島南部との差はそれほど大きくない。さらに出土地も限定的ではなく全国的に分布している (図 10)。今後はこの二つの課題の解明に努めたい。

最後になったが、筆者の未熟な日本語の校閲をしていただいた上奈穂美氏に感謝の意を表したい。
[補足]

本論文の投稿後に刊行された中村大介 2012 「燕鉄器の東方展開」『埼玉大学紀要 (教養学部)』第 48 巻 1 号をはじめ、2012 年度に開催された「東アジア古代鉄器文化研究学術フォーラム」の資料などを読む機会を得た。特に中村氏の論文は韓半島の初期鉄器を含めて、中国東北地方に至る広い範囲の初期鉄器資料に対する分析が行われた労作であった。これを読み、燕国の鉄器と韓半島の鉄器との関係についてより理解を深めることができたが、既に投稿した後だったのでこれらの成果を反映することが叶わなかった。燕—韓—日における鉄器の特質に対しては中村氏も本論文の元になる筆者の発表内容 (『韓国における鉄生産』たたら研究会平成 23 年度北九州大会) を多くのところで肯定的に引用しているし、共感することも多いと考えられる。ただし、韓半島と日本列島で鉄器が出現する時期についての意見の違いは、当時の粘土帯土器の年代を求める根拠が文献記事によるか、炭素 14 年代によるかの違いに起因するものである。韓半島に鉄器がもたらされた時期を戦国後期、あるいは戦国末～前漢初とみるか、それ以前にみるかの違いも同様である。

註

(1)——芳芝里遺跡の炭素 14 年代からみる限り、紀元前 6 世紀には既に円形粘土帯土器が出現していたと考えられるが、この遺跡は円形粘土帯土器の最も古い遺跡ではない。さらに、板付 II a 式の弥生土器との併行関係まで踏まえるとやはり紀元前 7 世紀に出現した可能性も捨てられない現状である。

(2)——勒島遺跡 (三角形粘土帯土器) の数多くの炭素 14 年代測定値は較正曲線上の BC400～BC200 年の谷部分の右側にあたる。また須玖 I 式の弥生土器と伴った資料である。よって、馬田や葛洞遺跡の炭素 14 年代を谷部分の右側にプロットすると、勒島遺跡の炭素 14 年代をより右側にプロットしなければならない。それは較正年代の範囲から外れることになるのであり得ない。円形

粘土帯土器と三角形粘土帯土器の順番を踏まえると、谷部分の左側にプロットするのが妥当である。

(3)——初期鉄器時代に時期を限定する場合。

(4)——灰色の点は完全には残っていないものの、復元で長さの推定計測ができるもの。

(5)——より新しい時期で、高さが高い梯形とは区別する。

(6)——南陽里 3 号墓出土品 (図 6 の 13) のように図面上でも確実に双合范で作られたと判断できるものもある。

(7)——前者は木柄と鉄斧の結合角度が垂直に近くて左右運動に、後者はその角度が鋭角であって、上下運動に適合な結合形態であろう。すなわち前者は刃と柄との方向が平行であるが、後者は直交である。

引用・参考文献

- 石川岳彦 2011「青銅器と鉄器普及の歴史的背景」『弥生時代の考古学3 多様化する弥生文化』, 195-215頁, 同成社
- 石川岳彦・小林 清樹 2012「春秋戦国期の燕国における初期鉄器と東方への拡散」『国立歴史民俗博物館研究報告』第167集, 1-40頁, 国立歴史民俗博物館
- 李 昌熙 2010「粘土帯土器の実年代—細形銅剣文化の成立と鉄器の出現年代—」『文化財』第43巻3号, 48-100頁, 国立文化財研究所
- 李 昌熙・石丸あゆみ 2010「靑島遺跡出土の弥生土器」『釜山大学校考古学科創設20周年記念論文集』, 291-331頁, 釜山大学校考古学科
- 李 昌熙 2011「土器からみた加耶成立以前の日韓交流」『加耶の浦口と海上活動』, 51-99頁, 加耶文化研究所・金海市
- 李 昌熙 2013「環朝鮮海峡における土器の実年代からみた鉄器の出現年代—日本列島における鉄器の上限年代を考える上で—」, 『日本考古学』第35号, 1-26頁, 日本考古学協会
- 李 南珪 2002「韓半島初期鉄器文化の流入様相」『韓国上古史学報』第36号, 31-51頁, 韓国上古史学会
- 中村大介 2012「燕鉄器の東方展開」『埼玉大学紀要(教養学部)』第48巻1号, 169-190頁
- 野島 永 1992「破碎した鑄造鉄斧」『たたら研究』第32・33号, 20-30頁, たたら研究会
- 野島 永 2008『弥生時代における初期鉄器の舶載時期とその流通構造の解明』研究成果報告書, 平成17年度～19年度科学研究費補助金基盤研究C(課題番号17520520)
- 野島 永 2009「鉄器の生産と流通」『弥生時代の考古学6 弥生社会のハードウェア』, 43-52頁, 同成社
- 白雲翔著・佐々木正治訳 2009『中国古代の鉄器研究』, 同成社
- 春成秀爾 2004「炭素14年代と鉄器」『弥生時代の実年代』, 148-160頁, 学生社
- 春成秀爾 2006「弥生時代の鉄器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第133集, 173-198頁, 学生社
- 藤尾慎一郎 2011『<新>弥生時代』, 吉川弘文館
- 村上恭通 1988「東アジアの二重の鑄造鉄斧をめぐって」『たたら研究』第29号, 1-20頁, たたら研究会
- 村上恭通 1994「弥生時代中期以前の鑄造鉄斧」『先史学・考古学論究』, 71-85頁, 龍田考古会
- 村上恭通 1998『倭人と鉄の考古学』, 青木書店
- 村上恭通 2003「中国・朝鮮半島における鉄器の普及と弥生時代の実年代」『考古学ジャーナル』12(No.510), 17-20頁, ニュー・サイエンス社
- 村上恭通 2011「弥生時代の鉄文化」『講座日本の考古学5 弥生時代(上)』, 651-678頁, 青木書店

(国立歴史民俗博物館外来研究員)

(2012年12月7日受付, 2013年5月24日審査終了)

The Calendar Date and Feature of Early-Iron Tools in Korean Peninsula

LEE Chang-hee

Iron implements have been considered to have appeared in the Japanese and Korean regions along with the Yan State's enhanced production capacity of iron implements and their proliferation to the eastern area. That time has been estimated from the end of the Warring States Period to the beginning of the Former Han Dynasty. Therefore, the appearance of iron implements has not been dated back to before the third century B.C. However, there are no tangible grounds for the dating. Some researchers are suggesting the possibility that iron implements spread out in the Yan State before 300 B.C.

Under these circumstances, the calendar date of round clay-stripe pottery, closely related with the oldest iron implements in the Korean Peninsula, was estimated by using the carbon-14 dating method. The estimation indicates that iron implements already appeared in the Korean Peninsula in the fourth century B.C. This result is consistent with the carbon-14 date of the ancient foundations from which iron implements were unearthed as well as an assumption of the long chronology of the Yayoi culture and simultaneous existence of clay-stripe pottery and Yayoi pottery.

A further study on early iron implements in the Korean Peninsula was conducted while laying stress on iron axes and making a comparison with Japanese materials. The study reveals the differences in features of iron implements between the two regions in spite of the almost simultaneous appearance. Cast iron axes seem to have had wide variations in the shape, mold, and excavation condition. One of the reasons for this is considered, however, that more double-banded axes have been excavated in the Japanese Islands than in the Korean Peninsula. Therefore, this article does not consider it appropriate to understand that the Japanese islands were under the influence of the Yan State or that iron implements were introduced into the Japanese Islands directly from the Yan State but not through the Korean Peninsula.

Judged from the foreign pottery unearthed in the Japanese and Korean regions, the appearance of the oldest iron implements in the Japanese Islands seem to have had a close connection with the immigration of people with round clay-stripe pottery. Round clay-stripe pottery in both regions were not locally originated but derived from overseas. Early iron implements and related technologies of the immigrants seem to have been transformed according to the local environment in the course of

their settlement. A study on the differences of how to accept iron implements between the Songguk-ri culture and the Yayoi culture can reveal differences of attitudes and perspectives concerning iron implements between the two cultures.

Key words: Early iron implements, Iron axes, Clay-stripe pottery, Calendar date, Immigration